

浅間山 8 月 10 日 2 時 37 分頃噴火の噴出物について

要旨：8 月 10 日に発生したごく小規模噴火のものと見られる噴出物について、8 月 12 日午前に山頂調査を行い、噴出物の分布を確認するとともに火山灰試料を顕微鏡で観察検討した。その結果、少量ながらも新たな本質物質と思われる、新鮮で発泡したガラス粒子を確認した。

分布：灰色の乾いた火山灰が、火口南西縁、縁に沿って幅約 10m、火口から遠ざかる方向に最大 5m の範囲で分布する（図 1、写真 1）。直下の火口壁や底部には火山灰が厚く堆積しているのが認められる（写真 2、3）。また、火口底中央部にも今回の堆積物が広く溜まっているのが認められる（写真 4）。

火口縁での堆積物の厚さ：火口際の最も厚い場所で約 3cm。

試料採取場所：火口南西縁（図 1 中に示す）。新しい堆積物の表層部から 100g 程度採取。

顕微鏡による観察結果：主に粒径 0.1mm～3mm の火山灰（写真 5）。量的に多いものは新鮮な塊状溶岩片（粒子）で約 50～60%（火口底の 2004 年溶岩に由来すると考えられる）。他に、変質した溶岩片（30%）、遊離結晶、ガラス片を含む。ガラス片は黒色～暗褐色で全体の約 10%を占め、最大で 2mm 径。ガラス片は気泡壁に囲まれた発泡組織を呈している（写真 6）。気泡内部に変質物の付着は認められない。

考察：2004 年 9 月 15-16 日噴火においても、褐色と無色の発泡したガラス粒子が放出され、火口縁には数 cm の厚さで堆積している。今回採取した噴出物の中にこれらが混入している可能性も考えられるが、以下の理由でその可能性は極めて低いと判断される。

1. 厚く溜まっている火山灰の表面から試料を採取した。
2. 黒色～暗褐色ガラス粒子は 2004 年の噴出物に比べて色が濃く、より低い粘性でできる、引き延ばされた形状を示す。
3. 無色の発泡したガラスが 2004 年の噴出物では多量に含まれたのに対し、今回のものには微量（約 1%）しか含まれない。

したがって、今回の噴火には本質物質が関与したと考えられる。

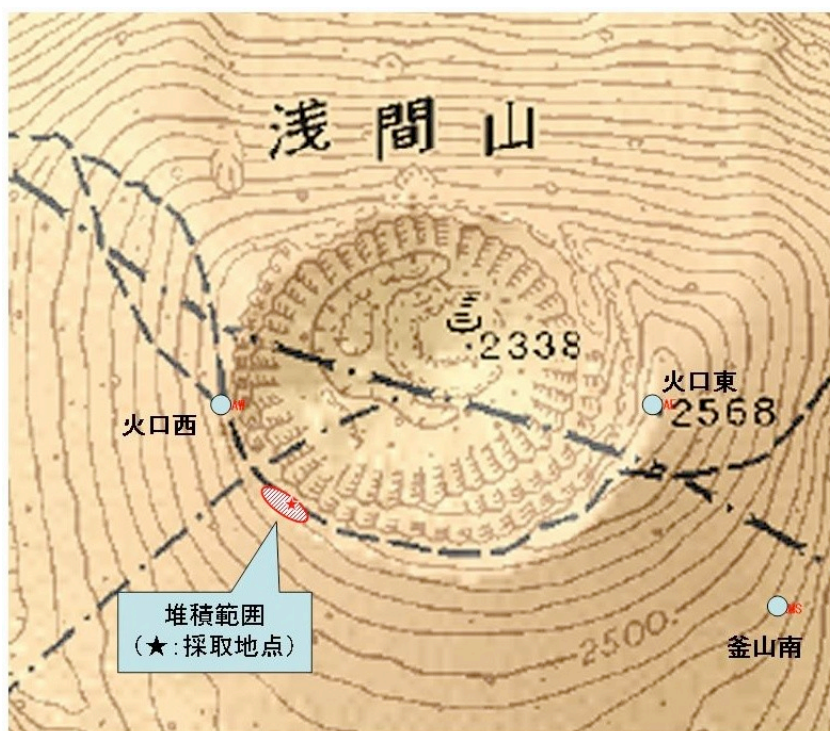


図 1：浅間山 8 月 10 日噴火と思われる火山灰の堆積場所と試料採取地点

浅間山



写真1：浅間山火口南西縁。白っぽく乾いた火山灰が薄く地表を覆っている。奥に観測者。
(火口付近の写真は全て8月12日午前撮影)。



写真2：火口壁にへばりついて堆積している火山灰。



写真3：南西側火口壁下部．火山灰が火口壁に向かって厚く溜まっている．



写真4：火口底中央部．暗灰色の火山灰が底部を広く覆っている．南西縁から撮影．



写真5：8月10日噴出と思われる火山灰の顕微鏡写真。横幅 11.2mm.
中央上方に複数の黒色ガラス粒子が見える



写真6：同上火山灰中で本質物質と考えられる発泡したガラス粒子（未洗浄試料）。横幅 7mm.

浅間山